

令和6年度東北福祉大学外部評価委員会報告(令和6年12月20日実施)

評価委員：委員長 保正 友子(日本福祉大学・社会福祉学部学部長・教授)
委員 米田 英一(JS コーポレーション代表取締役社長)
委員 石川 雄康(河北新報社取締役総務・防災教育担当総務局長)

1. はじめに

東北福祉大学の内部質保証システムの一環として実施されている、令和6年度外部評価の結果を以下に報告する。

前回の外部評価は令和元年7月に、「AO入試の取り組み」が行われている。今回は令和5年度の大学認証評価結果をふまえ、東北福祉大学が力を入れている取組の一つである「高大連携入試プログラム」に焦点を当て、「リエゾン教育プログラム～入学前教育～リエゾンゼミⅠ～入学前から入学後までのシームレスな教育プログラムの取り組みについて～」、令和6年12月20日に実施した。

外部評価委員会の委員として、保正友子日本福祉大学・社会福祉学部学部長・教授、米田英一株式会社 JS コーポレーション代表取締役社長、石川雄康株式会社河北新報社取締役総務・防災教育担当総務局長の3名が出席した。東北福祉大学からは、阿部裕二教授、千葉幸喜入学センター長、富澤弥生教授、渡邊生恵教授、千葉英俊総務部次長企画課長が出席した。

外部評価委員会では、まず事務連絡、千葉公慈学長からの挨拶の後、「高・大の円滑な接続について(今回の外部評価委員会の趣旨説明)」(説明者：阿部裕二教務部長・10分)、「リエゾン教育プログラムについて」(説明者：千葉幸喜入学センター長・20分)、「入学前教育について」(説明者：富澤弥生保健看護学科教授・20分)、「リエゾンゼミⅠについて」(渡邊生恵保健看護学科教授・20分)の説明があった。

その後、「リエゾン教育プログラム修了学生へのインタビュー」として、3人の学生(社会福祉学科1年生、教育学科・初等/小特コース2年生、保健看護学科1年生)と30分面接を行った。そして、質疑応答・意見交換を30分を行い、外部評価委員からの講評、大島巖副学長からの閉会挨拶、評価委員による打ち合わせを行い閉会となった。

外部評価を行うに当たっての主な資料は、①大学案内(Campus Guide Book 2025)、②入試ガイド 2025、③令和5年度自己点検・評価報告書、④「リエゾン教育プログラム」に係る資料、⑤「入学前教育」に係る資料、⑥初年次教育「リエゾンゼミⅠ」に係る資料である。

2. 東北福祉大学の高大連携プログラムの取り組みについて

1) リエゾン教育プログラムの概要

東北福祉大学では、高大連携プログラムとしてリエゾン教育プログラム・入学前教育・リエゾンゼミⅠを実施している。

そもそもリエゾンとは、フランス語で「つながり」「橋渡し」を意味する言葉であり、2018年の新学習指導要領で導入された「総合的な探究の時間」と大学教育とを結びつけることにより、大学教育を受講した高校生に「学力の三要素」(①知識・技能、②思考力・判断力・表現力等、③主体的に学習に取り組む態度)を修得してもらい、高校生の能力を引き出すこと、地域共生社会の実現に貢献できる高校生・学生を育成することを目的とし、2020年より開始された。

東北福祉大学で学べる福祉・心理・行政・経営・教育・看護・リハビリ・医療事務等の各分野について、大学での研究・教育に触れる機会を通して、自主的な探究学習や将来の進路選択

をサポートするプログラムである。毎年夏休みに開催している。受講修了者には修了証を発行し、高校3年生の受講修了者には「学校推薦型選抜 [リエゾン]」の出願資格が与えられる。

2020年度の修了者は328名(実数)であり、2024年度の修了者は794名(実数)と年々増加してきている。

2) 入学前教育の概要

入試合格後、入学手続きから入学までの間に実施するのが入学前教育である。入学前教育の主な目的は、①大学入学後の学修が滞ることなくスムーズに進められるようにする、②高校生としての基礎学力の確認・補習、③入学後に各学部・学科に必要な知識の習得、④入学前の不安を解消させる、⑤学習意欲・学力の維持、向上をはかることである。

東北福祉大学で実施している内容は、①各学部・学科に関連したテーマのレポート提出、書き方の指導、②専門を学ぶうえで必要となる教科の履修範囲の復習、③課題図書を読んで小論文形式のレポート提出、④オンラインでの講義、指導・相談である。

レポート課題は学科で異なっている。例えば社会福祉学科では「私の高校生活」「私のキャリアデザイン」について調べてまとめること。福祉心理学科では、世の中で「心理学」とされている本や資料にはどのような内容が多いか調べ、知らなかった領域の心理学の研究結果や主張を紹介し、その内容について考えたことを多角的に論じること。保健看護学科では「食物の消化・吸収・排泄の過程を調べて、理解したことを他の人に説明する」「人を理解するためのコミュニケーション方法を考える」ことである。

3) リエゾンゼミ I の概要

全学部学科の1年次生を対象に、基盤教育科目(必須)として開講されているのがリエゾンゼミ I である。目的は、①初年次教育としての大学生としての学びをサポートする、②約20名ずつを一クラスとすることで、新たな生活を始める学生たちの居場所づくり、③一クラスを学科教員2名(正・副)で担当することにより、学生の相談窓口としての役割を果たすことである。そのため、全学部で約60クラスが開講されており、多くの教員が担当している。

約全60クラスで開講されている共通の内容は、降誕会、防災教育、キャリア教育に加え、『2023年度改訂版テキスト リエゾンゼミ I』に掲載されている内容であり、大学生としての生活や学びについての内容や基本的な学習スキルである。

なおリエゾンゼミ I では、学生一人あたり500円の助成金が支払われており、各クラスで使途を決めて申請し使用可能となっている。

4) 各取り組みの評価結果

ここでは、それぞれの取り組みについて大学基準協会による評価や受講生アンケートから、どのように評価がなされているのかをみていく。

まずリエゾン教育プログラムについて、2023年度「東北福祉大学に対する大学評価(認証評価)結果」では以下のように評価されている。『リエゾン教育プログラム』において、高等学校の生徒を対象に大学の理念や学科の専門分野に関する講義等を夏季休暇期間中に開催し、当該プログラムを通じて福祉分野への興味・関心を高め、また、プログラム修了者に対して『学校推薦型選抜 [高大連携]』(今年度から [リエゾン]) の出願資格を与えている。このような特色あるプログラムを通じて志願者が増加しているとともに、福祉分野のみならずそれを応用した産業や保健医療分野を指向する学生の受け入れに繋がっていることは評価できる。

次に、入学前教育の評価を2023年6月に実施した新入生状況調査結果をみていく。9学科の新入生が評価した点は「レポート作成(様式・書き方)方法を身に付けることができた」「基礎学力を身に付けることができた」点であった。また、学修計画書作成にあたり参考になったものは、「大学案内(With You)」や「入学ガイド・入学試験要項」という声が多かったが、「高等学校の先生に聞いた」という声もあり、高校でも入学前教育の周知がはかられてきていることがうかがえた。

そして、リエゾンゼミⅠの2023年度授業評価は、下記6項目について実施されている。①授業の計画や進め方についてオリエンテーションで十分な説明があったか。②学習の到達目標とその評価方法について十分な説明があったか。③授業のテーマや特徴、受講時の留意点等について十分な説明があったか。④教員の話し方、教材や資料の提示、ディスカッションや実験・実技指導などは適切だったか。⑤学生が学習に集中できる授業環境になるように配慮していたか。⑥授業構成について工夫がなされたか。前期・後期を通していずれの項目も、「十分に」「ある程度」を合わせると95%前後の高い数値であった。

5) 学生へのインタビュー結果

リエゾン教育プログラム修了学生3名へのインタビュー結果に基づき、評価をまとめていく。

まず、リエゾン教育プログラムを受講した理由は、「学校推薦型選抜 [リエゾン]」の出願資格を得るためであったが、なかには別のタイプで受験した学生も含まれていた。

このプログラムを受講しての感想は、動画を見てレポートを提出することで大学の授業のイメージができたことや、専門の勉強ができ、別のタイプの受験の志望理由書に学習内容を生かすことができた、というものであった。

また、複数回受講することについては、専門の勉強の機会が多くて楽しかったことや、レポートの書き方が学べたという回答であった。

合格後の入学前教育については、高校三年次に受けられて良かったという声が聞かれた。

リエゾンゼミⅠについては、少人数で話し合うことで仲良くなれるうえ、教員がしっかり向き合ってくれるために相談できる環境があるのは良かった、とのことであった。

今後の改善点としては、ゼミによって行うことが異なること、もっとゼミ間の交流の機会がほしいという声が出された。

3. 東北福祉大学の高大連携プログラムの評価点

東北福祉大学は「行学一如」の建学の精神と「自利・利他円満」を教育理念としている。「行学一如」の「学業も実践も本は一つ」と、「自利・利他円満」の「支え合い、ともに幸せに」という考え方である。今回外部評価した一連の高大連携プログラムは、この大学の理念を具体的に実現していると考えられる。

全体的に東北福祉大学の一連の高大連携プログラムは、高校における「総合的な探究の時間」に資するとともに、入学前から入学後まで一人ひとりの生徒を親身になってサポートしており、大いに評価できる。少子化に伴う受験生確保が課題となるなか、志願者増にも結び付いており、全学挙げた取り組みの効果と言えるだろう。とりわけ、以下の三点は高く評価できる点である。

第一は、リエゾン教育プログラムや入学前教育において、専門的な学びを行うことにより、大学での学びのイメージが形成でき、モチベーションが上がる点である。高校生のうちから専門的な学問領域に触れ、その領域での課題解決に向けて思考する機会を得ることで、その領域への興味・関心が深まると同時に、早期から自分の将来像をイメージするキャリア形成の機会

になるといえる。また、大学について十分に理解したうえでの受験のため、入学後のミスマッチを防ぐこともできる。

第二は、全てのプログラムを通して、レポートの書き方や発表の仕方をはじめとする大学での学習スキルが修得でき、ひいては学力の三要素を修得するうえでも効果的な点である。とりわけ、早期に学習スキルを修得することにより、学びたいテーマが生じた際にシームレスに取り掛かることが可能になるため、大学入学後の学習や卒論執筆、社会人になった際にも効果的といえる。

そして第三は、リエゾンゼミでは少人数教育で2名の教員を配置することにより、木目細かいサポート体制と学びの環境が保障されている点である。特に大学1年次は勉強面のみならず生活面や友人との関係面でも多くの不安が生じる時期である。そのような時期に、友人とも教員とも関係が作りやすい規模のゼミがあることで、より安心した学生生活を送ることが可能になるだろう。

4. 東北福祉大学の高大連携プログラムの改善点

一方、今後改善が求められる点は以下の二点である。

第一は、教職員の負担軽減である。木目細かい取り組みゆえに、教職員の負担の大きさは想像に難くない。同プログラムの継続は、教職員が、「やらされ感」を持たずに前向きに取り組み続けられるかに掛かっており、教職員の負担感の軽減とモチベーション向上が喫緊の課題になる。

東北福祉大学が高校との連携を深めながら試行錯誤のうへ、形作ってきた一連のプログラムは一朝一夕に構築できるものではなく、他大学が追随することが難しい独自性豊かな取り組みであるという事実を、まずは学内できちんと評価し共有することが大切である。そのうえで、オリジナリティを損なわない範囲において、外部の力に頼ることも含めた教職員の負担軽減策を慎重に検討してほしい。教職員に対しては、こうした学生の生の声をフィードバックするとともに、何らかの人事上の評価を行うことが、引き続き同プログラムに意欲的に向き合うための動機付けになるのではないだろうか。

なお、現在、高校生からのレポートは紙で提出し職員が仕分けを行っているが、この点は Web 提出可能なシステムをつくることで解決できると考える。

第二は、学科間、クラス間での不公平感への配慮である。学科により、多少内容が異なる点が見られた。例えば、入学前教育の課題の難易度が異なる点が見受けられた。なかでも、リハビリテーション学科の教材には物理・化学・生物といった専門的な内容が含まれており、一部の学生にとっては少し難しく感じられるかもしれない。

またシラバス上、担任教員との個人面談が組み込まれている学科もあることから、大学として力を入れていることが分かるが、シラバスに「個人面談」が入っていない学科がある点が気になった。授業以外に学生とのコミュニケーションを深める場があるのかもしれないが、公平感に不満を持たれないような配慮が必要だといえる。

さらに、リエゾンゼミの内容で他クラスでは行っているのに自分のクラスは行っていないという状況が生じると、学生の不公平感が生じる。それについては担当者間で十分な情報共有を行いながら取り組むことと、時にはゼミを超えた合同企画を行うことも必要であろう。

最後に、東北福祉大学の一連の高大連携プログラムは、高校から大学へ、そして社会へとシームレスにつながる誇れる教育であるため、今後もさらに磨き上げていただければと考える。そして、このプログラムを受講した学生が、将来有為な人材に育っていくことを期待したい。